

# 東日本大震災における

## NPO法人ロシナンテス 6ヶ月間の活動報告

平成23年3月14日～平成23年9月30日

大嶋 一馬



9月7日時点での東北ロシナンテススタッフ

(左から) 清水啓右、大嶋一馬、山本真衣子、川原尚行、工藤博康、西條和代

## 閑上（ゆりあげ）

東北の漁師町にはよく日和山（ひよりやま）が見受けられます。宮城県名取市閑上地区の日和山は大正時代、海の日和を見るために造られた人工の小高い丘です。このことから、閑上という土地が平地であるということと、漁業で栄えた町であるということがわかります。



左の写真は震災直後の日和山です。この海拔約8mの小高い山に家の屋根が乗り、瓦礫が散乱しています。日和山からぐるりと周りを見渡すと、一面に瓦礫が散乱している状態でした。主だった道路だけは自衛隊により、一週間を待たずに瓦礫が撤去されていました。

まだ津波による海水がたまり、池の様相を呈している場所が多くみられました。特に田んぼは水はけが悪く、半年を経た現在でも完全に海水が抜けきっていないといえませんが、

閑上地区（1丁目～7丁目）は、約90%の家屋が津波により流出したため、家屋が流出しなかった地域に比べ、瓦礫撤去作業は早期に行われ、現在では集められた瓦礫が、巨大な瓦礫の山となっています。

## 避難所（巡回医療～ラジオ体操～お絵描き）

3月14日に名取市に到着し、ロシナンテススタッフの看護師である成田清恵の知り合いの病院を通じ、岩沼市総合体育館の避難所と、名取市立館腰小学校の避難所を巡回診療することになりました。

一般的に避難所での巡回診療は体育館等の施設ならば会議室や事務室を診察室に見立て、学校の避難所ならば保健室や校長室を診察室に見立て、具合の悪い人にそこまで足を運んでもらい診療するスタイルをとるようです。しかも大きな病院等から派遣されてきた医師は、一定期間で別の医師と交代します。しかし、川原はそのようなスタイルをとりませんでしたし、短期間ではなくスーダンと同じ「フォーエバー」という気持ちで臨みました。

毎日、端から端まで一人残らず声をかけ続けました。「おはようございます。からだの具合はどうか」「夜眠れなかったりしませんか」などとその人その人に合わせて声をかけ、特にご年配の方には肩に手を当てたり、手を握って話を聞いたりしました。そうしたことを毎日続けていくうちに安心感から信頼感が芽生えたようで、一週間も経つと旧知の仲のように笑顔が見られ、個人的な相談や悩みを打ち明けられるようになりました。川原先生はいつまでここに



いるのですかと多くの人に頻繁に聞かれました。その時には必ず「皆さんが元気になるまでここにいますよ」と答えました。

震災直後はとても寒く、避難所の食糧事情も悪く、緊張やストレスから被災者の皆さんの体力も落ちていました。加えて避難所の窓は常に閉め切っていたので、インフルエンザが蔓延する兆候が現れました。市の保健センターや医師会、東北大学、九州大学の先生などと早急に協議し、予防内服を含めたインフルエンザ対策を講じました。その効果は大きく、避難所じゅうにインフルエンザが蔓延することはありませんでした。

インフルエンザ対策の一つとして、換気の必要性を強く感じました。しかも、避難所での一人のスペースは畳一畳分程度ととても狭く、体を動かしたり運動することもなく、寝たり起きたりするだけの毎日です。



その時に、ラジオ体操をし、その間窓を開け換気をするという名案が浮かびました。避難所の自治会長さんに事情を説明し、早速翌日からラジオ体操と換気を実施しました。思いのほか好評で、最初に上体を後ろに反らすとき「あぁ」という吐息とともに笑い声が聞こえました。ラジオ体操がすすむにつれ次々と笑みがこぼれるようになり、最後の深呼吸が終わると自然と拍手喝采となりました。全員笑顔でそれは大きな拍手でした。

とても感動的な一瞬だったと思います。それと驚いたことは、小学校一年生から80歳くらいのご年配の方まで、全員ラジオ体操を覚えていたということです。子どもからお年寄りまでが共通のことができる素晴らしさを感じました。ラジオ体操は日本人の宝だと感じ、教育の大切さも同時に感じました。

このラジオ体操は避難所での日課となり、体操のお兄さんことロシナンテススタッフの西條智博が体育館に入るや否や、すっと立ち上がるご年配の方も見受けられるようになりました。西條は当初「体操のお兄さん」としてスタートしたのですが、のちに「体操の先生」と呼ばれ、避難所にてストレッチ体操を広めるなど健康増進の一役を担いました。ラジオ体操を開始してしばらくすると、折角換気のため窓を開けているのだから、ついでに掃除をしたい、またラジオ体操の歌を歌いたいとの提案が被災者の方からあり、大変嬉しく思いました。私たちが避難所に到着すると一斉に窓を開け、おおきな声で歌を歌い、思いきりラジオ体操をし、全員で掃除をする毎日が、避難所が閉所さ



れるまで続けました。



避難所では大人は、日中忙しく動き回るか、仕事に行くか、震災のショックからか日がな一日ぼんやりと過ごすかという大きくわけて 3 つのタイプに分かれているようでした。したがって子どもの相手をしてあげられる大人はほとんどいなかったもので、子ども達は退屈でした。子ども達にも震災による大きなショックはあったのですが、そこが子どものいいところで、やはり思いっきり遊びたいという衝動は抑えられないようで、西條が活動の合間を見つけては子どもたちと遊んであげると、大きな反応がありました。そこでロックバンドである「かりゆし 58」の前川真悟氏が瓦礫撤去作業のために来訪した際に、子ども達にコンサートを企画させたり、西條の専門分野のサッカー大会を開催したりしました。子どもの遊びに対する貪欲さは万国共通で、疲れを知らず、わたしたちが避難所を後にする際は、いつも名残惜しそうにしていたのを忘れられません。

避難所では、最低限のプライバシーを守るために、各家庭が段ボールのパーティションで仕切られています。薄茶色の色気のない段ボールに囲まれた生活は、やはり沈みがちになるようで徐々に活気がなくなってきましたので、4月8日、段ボールのパーティションに和紙を貼りめぐらせ、そこに絵や言葉などを何でも自由に描いてもらうことを企画しました。子ども達の発想はとても自由で、大人には考えのつかないものも多くありましたが、中でも印象的だったのは「閑上」に関するものがとても多かったことです。閑上小学校の校歌や、閑上ビーチや、閑上の特産品の赤貝などが目立ちました。川原は絵心がないことを自覚していたので、「今を大切に」と筆で大きく書くと、ある女の子が「生きるのだ」とつづけました。ため息の出るような感動で包まれました。まだそのころは、ロシナンテスの活動がどうなるのか、いつまで続くのか、明確ではありませんでしたが、このことをきっかけにして活動の目的がはっきりとしたように思います。



この日は、たまたま避難所に楽天イーグルスの選手の来訪と重なり、イーグルスの選手にも描いていただきました。お絵かきの最後に今までの支援を下



さった方々にお礼を伝えましょうと子供たちが「ありがとう」と書きました。これには私たちも感激し、この子供たちのために支援し続けようと心に決めたのでした。

## お花見

東日本大震災が発生した3月11日頃から4月末日までを震災に対する緊急フェーズだとすると、それは桜の開花が北上する期間にあたります。今年は震災の影響で自粛ムードが高まり、色々な行事やイベントが中止となり、お花見も例外ではありませんでした。未曾有の震災に加えて、全国的な自粛ムード、この鬱屈した空気を一層したいと常に考えていました。しかし、被災をしていない日本全国の人々が、被災者のことを思い、花見などを自粛する気持ちも理解できます。むしろこれは、被災者側が花見を行い、これを全国に発信し、日本中を縛っている自粛ムードを解き放とうと考えました。

4月15日は、瓦礫撤去を行っている岩沼市玉浦地区の三軒茶屋集会所で、4月16日は館腰小学校裏の雷神山で、4月17日は千本桜で有名な柴田郡柴田町の船岡城址公園で、お花見を開催しました。雨の予想でしたが、3日間とも天候に恵まれ、解放感あふれるお花見となりました。

初日の玉浦集会所でのお花見は、花屋から桜の枝を買ってきて室内に飾りました。お互いのがれき撤去作業の労をねぎらうような会になりました。最後のあいさつで早股下二地区の自治会長の宮さんが号泣され、同席したわたしたちやがれき撤去作業のボランティアの方々も、全員もらい泣きました。



4月16日は、館腰小学校避難所の被災者の方々と、ピクニックがてら小学校裏の雷神山へ登り、お花見をしました。前日の玉浦地区のお花見では、大半の方が自宅に戻られていましたが、今回は全員避難所からの参加だったので、大いに解放感を味わってもらえたようです。バーベキューや焼き鳥を焼いたり、有名ラーメン店の炊き出しが来たりと、お酒もすすんだようです。避難所生活で初めて学校の外に出た方も多く、普段では見られない笑顔が多く見受けられました。お酒が進みすぎて、立てなくなった年配の女性を、車に乗せて避難所までお送りしたのですが「今まで生きてきた中で一番楽しかった」と、何度も繰り返し話していたのがとても印象的でした。



最終日の4月17日は、館腰小学校避難所の被災者の方々と、館腰小学校から高館小学校避難所へ移動した方々を、バスを仕立てて柴田郡柴田町にある、千本桜で有名な船岡城址公園へ行き、お花見をしました。川原とロシナンテス顧問弁護士の坂井一郎先生のポケットマネーで購入した、東北の地酒100本を並べ、地元料理の「とんちゃん」や笹かまぼこなどのおつまみ

を用意し、焼きそばやピザなどの炊き出しを頂戴し、子どものためにはジュースやお菓子も用意し、充

実したお花見となりました。この日は川原が先陣をきって歌を歌い、炭坑節を踊り、大いに盛り上がりました。それで火が点いたのか、年配の女性の方々が、次から次へと懐メロを披露し、歌わない人は調



子を合わせて踊り舞いました。楽器やカラオケもなく、桜の下で手拍子のみで歌い踊る姿は、日本の宴の原型を見るようで、心が洗われました。花見に参加したボランティアの方々も「とても美しい光景で、涙が出た」と言っていました。

3 日間にわたり、お花見を開催したのですが「時期尚早では」という声もありました。しかし、ある事柄について、やるかやらないのか悩むのであったら、やったほうが良いと思いますし、あれだけ大勢の方の笑顔を見ることができ、また感謝もされ、やはり開催する決断をしてよかったのだと思います。

## 桜

桜の幼木が一人前の桜になるには、20 年かかるといえます。この頃には、ロシナンテスの日本での活動は、被災した子ども達の将来のために、ひいては日本の将来のためにすると決めていました。それを具現化するために、閑上地区の象徴である日和山に子ども達と桜を植え、20 年後に花見をしようと約束しました。

4 月 20 日、館腰小学校と高館小学校の避難所にいる子ども達の有志を募り、京都の庭師である皆川司さん協力のもと、ひとりひとり交代にスコップを入れ、桜の幼木を植えました。ボランティアに来ていた歌手のしおりさんが持っていたひまわりの種も植えました。

この桜の木は、閑上の子とロシナンテスの約束であり、大げさに言えば川原の誓いであると思います。今から 20 年後が楽しみです。



## がれき撤去

巡回診療を開始した直後に、岩沼市総合体育館に避難している年配のご婦人が、沈痛な面持ちで打ち明けました。その内容は、昨日自宅に戻ってみると床上 1m ほど浸水しており、家屋内と敷地内は瓦礫や泥やドラム缶等が散乱していて、めちゃくちゃな状態だったということでした。一人で暮らしているので、何から手をつけていいかわからず、家が元の状態に戻るまで何年かかるかわからない、と嘆いて



おられました。これを聞いて川原はがれき撤去作業をする決意を固めました。

早速、その老婦人の住む、岩沼市玉浦の早股下二地区の自治会長と相談をし、3月18日に宮城県名取市に入った川原の後輩 大嶋一馬にがれき撤去作業を託しました。3月22日、大嶋は自治会長と相談し、3月25日に当該地区の道路のがれきがすべて撤去され、断水されていた水道が開通するので、3

月26日をがれき撤去開始日とすることを決めました。

ここから以下は、赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート基金」助成事業の応募書に記載した「これまでの具体的な活動内容」を転載します。(平成23年7月31日提出)

3月16日、医療チームは、患者さんの不安解消のために、患者さんの住居の調査が必要と判断し、本部へ連絡、大嶋一馬、西條智博（スーダンでのサッカー指導に従事で一時帰国中）を調査チームとして、同日、支援物資を満載して陸路出発し、18日宮城県に到着、19日から21日まで現地調査をした。22日大嶋は、岩沼市総合体育館で避難生活を送る早股下二地区の自治会長である大宮一清氏と打ち合わせをし、その後、岩沼市社会福祉協議会へ赴き、大宮氏とともに協議した、①個人ではなく、NPO法人ロシナンテスとしてボランティア登録、②早股下二地区の自治会・青年団と協働しての瓦礫撤去作業、③使用道具・移動費・車両等の一切はロシナンテスで手当てすること、④撤去作業等の方針に関しては、社会福祉庁議会の指示に従う、等に関し、合意した。23日から名取市とその周辺のホームセンターで瓦礫撤去に使用する道具、(スコップ、運搬用一輪車(ねこ)、バケツ、ホース、ほうき、ちりとり、高圧洗浄機等々)を相当数購入した。ボランティア受け入れのための宿舎の確保、食事、風呂、拠点場所から活動地への移動手段的確保などを行った。また本部と連絡を取りながら、全国からボランティアを集めるために、当団体のホームページへの掲載、当団体の支援者への電話連絡などを行い、25日、第一陣のボランティアとなる自治医科大学と九州大学の学生を迎え入れ、スタッフとボランティアの共同生活がスタートした。



3月26日から瓦礫撤去作業を開始した。大宮自治会長の指示の下、一人暮らしのご老人のお宅、体が不自由な方がいるお宅と、優先順位を話し合いながら作業を進めた。また、岩沼市早股下二地区の青年団と協働し、あるいは手分けして作業を進めた。重労働であったが、作業が進むにつれ自治会や青年団との交流が深まり、4月15日には集会所で早股下二地区の住民の皆さんとロシナンテススタッフおよびボ

ランティアとで花見を開催した。参加者全員で笑い、泣き、息の詰まる生活に花を添える機会となった。

一方、青年団は瓦礫撤去作業を通じて、より結束が強まり「がんばっと!!玉浦」を立ち上げ、理事長川原尚行の知人、かりゆし58の前川真悟・歌手のしおり・同じくやなわらばー・加藤登紀子らを招いて、玉浦小学校で住民のためにコンサートを当団体のサポートを受けながらも自主的に開催するにいたった。現在も地域を活性化させるべく、仮設住宅の焚き出し、宮城県北部・亶理郡山元町の避難所でのコンサート企画、幼稚園や小学校にひまわりの鉢を寄付するなど、幅広く活動を続けている。岩沼市での瓦礫撤去作業は5月8をもって終了したが、地域住民との交流は現在も続いている。

4月初旬より日本造園組合連合会を通じ、当初は八王子、後に全国の造園業者のボランティアを受け入れることになった。ユンボなどの重機やダンプを持ち込み、専門のオペレーターの活躍により、作業の進捗度合いが格段に上がった。

そのため4月の下旬には、早股下二地区の瓦礫撤去の終焉が見え始めた。亶理郡山元町の瓦礫撤去作業が遅れていることを聞き、山元町社会福祉協議会と相談した結果、5月3日から花釜地区を担当することになった。この地区は、7月27日現在も一時帰宅しか認められていない地区で、5月3日時点で被災者は小・中学校の避難所か、アパートを借りて生活をしていた。危険区域の制限が解除されたとき、すぐに自宅に戻れるように瓦礫撤去と床の張替え等が必要なので、瓦礫撤去と屋内外の清掃を担当した。岩沼市でもそうであったが、作業当初は家主さんの表情が暗いものであったのが、作業が進むにつれ明るくなり、作業後半ともなれば大抵の方は饒舌になり深くコミュニケーションが取れるようになった。危険区域の制限が解除されたとき、瓦礫撤去等をせずにはすぐ帰宅できるため希望が湧いてきたものと思われる。

7月26日現在、受け入れたボランティアの数は287人となっている。

#### 一日の活動・瓦礫撤去作業について



午前7時に全員そろって朝食をとり、作業の準備をする。朝食の準備は、ハウスキーパーとして業務委託をしている西條和代が担当する。午前8時に活動拠点を出発し、午前9時より被災地にて瓦礫撤去作業を開始、正午から午後1時まで食事休憩をとり、インスタントヌードルや自前で用意してきたおにぎり等を摂る。午後1時から作業を再開し、午後4時で作業を終了、午後5時に活動拠点に到着する。午後7時から夕食を

とり、夕食後反省会および明日の作業のミーティングをおこなう。夕食の前後にシャワーを使うが、一つしかないので、週末などボランティアの人数が多いときは近所のスーパー銭湯(極楽湯)を使った。

岩沼市早股下二地区・亶理郡山元町とも津波による床上浸水の被害を受けた地区で、住宅の敷地内および家屋内に大量の泥・藁・瓦礫や自動車・ドラム缶・プロパンガスのボンベ等が堆積していた。特に

岩沼市早股下二地区は、海岸から住宅地までの間にドラム缶やプロパンガスを充填する工場があり、満タンに充填されたそれらが敷地内に散乱している状態だった。

作業の手順は、まず敷地内に散乱した大型の瓦礫や、流木がある場合はそれらを除去し、敷地内の泥や藁、散乱した日用品等を、スコップを用いて運搬用一輪車（ねこ）に移すか、造園業者が重機等や



ダンプ等を使用して、指定された仮集積場まで運搬する。それを繰り返し、家屋前や家屋周辺の一定範囲の泥や瓦礫を除去したら、そこにブルーシートを敷き家屋内の今後も使用する家具等の汚れをふき取り、ブルーシートの上に置く。それから、使用不能となった大型の電化製品や使用不能となった家具等を仮集積場まで運搬し、家屋内の泥や藁、散乱した日用品を、スコップを用いて運搬用一輪車（ねこ）に移し、指定された仮集積場まで運搬する。特に大変だったのが、風呂場・便所・キッチンだった。畳を全て仮集積場まで運搬する。畳の下の泥を、スコップを用いて運搬用一輪車（ねこ）に移し、指定された仮集積場まで運搬する。高圧洗浄機を用い、海水で濡れた部分を丁寧に洗浄し、噴出された水を除去し、雑巾で完全にふき取る。外のブルーシート上の家具等を家屋内に戻し、敷地内の残った泥や瓦礫を、スコップを用いて運搬用一輪車（ねこ）に移すか、造園業者が重機等やダンプ等を使用して、指定された仮集積場まで運搬する。家具等を廊下などによけて、床板をはがし床下の堆積した泥を除去する。廊下やキッチンなど床板をはがせない場所は、床下にもぐり這って行って泥を除去する。最後に床下・敷地内の全部分に消石灰をまんべんなく散布し終了。

\*9月末日現在、受け入れたボランティアの人数は350名にのぼる。

-----（転載終了）-----

## 「どうする閉上」復興会議

避難所の運営は、そこに避難した被災者の方々に委ねられています。ロシナンテスは、巡回医療を通じて名取市立館腰小学校の体育館に避難する方々と深い親交を持つようになりました。館腰小学校避難所の自治は、毎晩7時から避難所の運営や支援物資の配給方法等を検討する運営委員会が開催され、それが終わると、班長会議が開かれていました。班は9世帯ずつ12班に分けられ各班に班長がおり、両会議のまとめ役として自治会長と副自治会長がいました。

最初は混乱をきたしていた避難所の運営も、両会議が機能し出すと一週間もしないうちに落ち着きを見せるようになりました。避難所にいる被災者の大半が、家や車を流され、家族さえ失った方も多くいましたが、川原は、こんな時こそ、生きる希望が必要だと考え、被災者自らが考え組織する、復興を考える会をつくることを薦めました。亡くなった人を惜しみ、失ったものを慈しむ気持ちも大切ですが、

生きている人間は、希望や目標を持ち、前を向いて歩いていかなければなりません。そのことを、すぐに理解した自治会長は、主要なメンバーと協議し、4月27日、館腰小学校避難所の自治会の運営委員会を母体とする「どうする関上」復興会議を立ち上げました。



川原は、常識にとらわれず、自由な発想で、自分たちの住む新しい町づくりを考えるように進めました。また、その当時はテレビや新聞などで、国会議員や大学教授の「今回の震災は未曾有の震災だから、これまでの枠組みに捉われない復興策を考えなければならない。例えば、津波に被災した地域の土地は国が全部買い上げ、被災者に代替地を用意すべきだ」という論調が多いこともあって、「どうする関上」では関上の町を仙台東部道路の西側に集団移転させようと考えでまとまりました。

仙台東部道路は、関上海岸線から約3Kmに位置する土盛りをした高速道路で、東から来た津波をこの高速道路が堰き止めました。津波のことを考えると海からは離れたいが、関上からは離れたくないという思いの折衷案が仙台東部道路のすぐ西側に新しい関上の町をつくるというものでした。

ロシナンテスは、「どうする関上」に毎回欠かさず出席し、助言をしたり、意見を取りまとめたり、議事録を作成したり、バックアップしてきました。

平成23年9月現在、以前活発だった被災地を国が買い取り、代替地を与えるという論調は皆無となり、何も方針を示さない国に対し、名取市では現行法に基づいた被災市街地復興土地区画整理事業による、現地再建を選択しています。現行法の範囲内で復興するならば、約6,000人が生活する町の、防災集団移転促進事業による復興は困難です。現在では、土地区画整理事業のなかで、居住地域をどこにするかとか、小・中学校の位置などの問題を検討し協議しています。

ところがここで、大きな問題が生じました。ひとつは、土地を所有している住民と、土地を所有していない住民の置かれた立場に、大きな違いがあることです。土地を所有している住民は、被災市街地復興土地区画整理事業により、換地という形で多少面積は減少するものの代替地を所有することができます。ところが土地を所有していない住民の多くは、新しく作られる関上の町最東端に出来る耐浪型高層災害公営住宅を選択することしかできません。その災害公営住宅の建設予定地は、関上2丁目の部分で、関上地区で一番多くの犠牲者が出た場所なのです。大学の研究者などが、高性能のコンピュータなどを使用してシミュレーションし、3m土盛りをするのだから安全だ、と言われてもその場所に安心して住めると考える住民はほとんどいません。ですから、土地を所有していない人や、若いお父さんお母さんは、新しい関上の最東端をもっと西側（海から離れる様）から始めるように希望しています。しかし、土地を所有する住民たちは、もし次に同じ様な津波がきても、耐浪型高層災害公営住宅により津波が緩らげられると考えている人もいますし、津波の襲来により価値がなくなるのではないかと心配していた自分の土地が、換地という形で今よりは安全性の高い別の場所に土地を所有できる安心感からか、市の提示する復興計画案に概ね賛成する方も多くいらっしゃいます。



もうひとつは、小・中学校の位置が大きな問題となりました。市が提示した復興計画案の図では、新しい小・中学校では新しい閑上市街地の中心部に位置していました。それは現在の小・中学校の位置よりも東側（海より）に位置しているので、小・中学校の子どもを持つ若い世代の保護者は猛反発しました。しかし、市側は「これはあくまでもイメージで小・中学校の場所はまだ決まっていない」と繰り返すばかりで、その図を変更したり、訂正したりということはありません。また、若い保護者

の「小・中学校をもっと西側に！」「小・中学校を仙台東部道路よりも西側に！」という意見に対し、異を唱える人が出てきました。曰く「大学の専門家が安全だと言っているのだから安全だ」、曰く「細かいところでいちいち引っかかっては復興が遅くなる」、曰く「学校は町の中心にあるのが当然だ」。その中には、それまで若い保護者と一緒に集団移転を叫んでいた人も、多く含まれていました。しかも、相反する意見は表立って議論されることは稀で、お互いに相手のいないところで語られ、それが漏れ伝わってくるという有様でした。

各世代や社会的立場によって、様々な意見が出てくるのは、至極当然です。しかし、それが公で議論されることなく、影で相手を牽制しつつ語れるならば物事は何一つ前に進みません。公に議論されても、議論が紛糾すれば、中々前に進まないこともあるかもしれませんが、お互いに相手のいないところで、好き勝手なことを言うだけでは、絶対に何の結論も得られません。閑上住民ひとりひとりの意見が吸い上げられ、公に議論され、閑上住民の意見がひとつとなるような話し合いの場が必要だと感じました。しかし、このことをすべて住民任せにすると、住民同士の利害関係や、思惑の相違が浮き彫りとなり、いがみ合いにまで発展する恐れがあります。

ずっとこの経緯を見ているロシナンテスとしては、利害関係がなく、公平な判断が出来、住民に信頼される第三者が必要だと感じていたのですが、震災直後から被災者と一体となり行動を共にする団体は、ロシナンテスしかありませんでした。ロシナンテスは現在、閑上の住民から依頼される形で、閑上住民がひとつにまとまり議論できるテーブル作りに精進しています。後述しますが、その第一弾として「閑上復興いも煮会」の開催をサポートしました。

医療支援やがれき撤去作業の支援は、その効果が誰の目にも見えて、はっきり確認できます。病気にかかった人は病状が回復しますし、津波の被害でめっちゃめっちゃになった家は、綺麗になります。「どうする閑上」復興会議等の支援の効果は、一体何なのでしょう。目の前に、明らかに困っている人がいるので、サポートをしてきましたが、その目的が何なのか、答えを見出すことができませんでした。しかし、この半年間切れることなく、ずっとサポートを続けてきて、今の段階で言えることがひとつだけあります。それは「生きる希望」です。

人は、金銭的に裕福でも、その人に生きる希望がなければ、楽しく生活することはできませんし、前を向いて歩いて行くことができません。しかし、どんなにつらい状況であっても、生きる希望があればそこに何か光るものがあれば、笑って過ごせることができるものだと思います。ロシナンテスは、それをスーダンに見てきました。

私たちは震災前の被災者の生活を知りません。色々な方が震災前の生活のことを話してくれましたが、知りません。彼らは、今、人生最大の窮地に立っています。だけど、ほんの一筋でも、生きる希望を持てば、前向きに歩いていけるのだと思います。今私たちがしている活動は、被災者の方々が、生きる希望を持つ、そこに集約されている気がします。誤解をしていただきたくないのは、いわゆる上から目線ではなく、寝食とまではいきませんが、彼らと行動を共にし、一緒になって考えているからこそ、そう思えるのです。私たちさえも、その中に、生きる希望を感じます。大袈裟に言えば、この閉上から始まって、日本全体が生きる希望を持てるような国になればと思います。

ですから、この活動に関しては、1年、2年という短いスパンではなく、10年、20年いや50年、100年という壮大な活動だと考えています。すぐに結果は出ませんが、だからこそ、たゆまぬ努力を続けていきたいものです。

## 「寺子屋 閉上」

避難所では子ども達は、勉強する環境にありませんでした。避難所内では一人一畳程度のスペースしか確保できず、常にざわざわしていて静かに勉強に集中できる時間も場所もありません。消灯時間はお年寄りに合わせて午後九時で、真っ暗になります。灯りを点けると周りの人の迷惑になり、なにより3月4月の体育館の夜はとても寒かったのです。

避難所の被災者の皆さんと親交が深まるにつれ、それぞれの職業や性格、これまでの生活などがなんとなくわかるようになりました。館腰小学校の避難所にいた工藤博康さんは、閉上地区で十数年にわたり「工藤塾」という私塾をしていました。震災の翌日(3月12日)から、子ども達がずっと勉強ができない環境にあることを気にかけていました。震災の影響で4月21日が小中学校の始業式だったので、40日間勉強できなかったことになり、学習の遅れなどを強く気にしていることを知り、工藤さんをローカルスタッフとして雇い入れ、ロシナンテスが主催する無料私塾「寺子屋 閉上」を開校することを決めました。

すぐにでも始めたかったのですが、避難所では寺子屋を開催する場所も時間もとれず、仮設住宅にできる集会所で実施することにし、仮設住宅ができるまでを準備期間としました。

ゴールデンウィーク中の五月初旬、名取市の仮設住宅の第一号となる箱塚桜仮設住宅への引越しが始まりました。箱塚桜仮設住宅の自治会が立ち上がり、集会所の使用許可をいただいたのは5月下旬になってからでした。



学習の遅れがあるというものの小中学生に、短期間で多くの学習をさせることは難しいと考え、さしあたり週一回寺子屋を開くことにし、慣れてきたら週二回にすることとしました。

6月2日、名取市長をお迎えして開校式を開きました。30名を超える子ども達とその保護者であふれかえる集会所、とても熱気あふれる開校式でした。小学生と中学生の学習時間帯は別々にし

て、小学生は1時間、中学生は2時間の学習時間としました。

初日から、勉強に集中し、解らないところは貪欲に質問していました。いかに、学習する機会に飢えていたかわかりますし、お友達と一緒に勉強することの楽しさを感じているようでした。しかし、子どものことですから、じきに飽きてしまって生徒数も減ってしまうのではという心配もありましたが、むしろ四か月経過した現在では、開校時より生徒数も増え、安定した運営が来ています。



7月14日、箱塚屋敷仮設住宅の寺子屋を開校し、7月19日、愛島東部仮設住宅の寺子屋を開校しました。箱塚屋敷・箱塚屋敷・愛島東部仮設住宅の三か所に、名取市立不二が丘小学校に間借りしている閑上小中学校の生徒の大半が網羅できます。

この「寺子屋 閑上」事業は、少なくとも仮設住宅がある間は続けて行こうと考えています。また、閑上地区が復興したのちも、できることならかわっていかれたらと思っています。

というのも、現在閑上の復興について話し合っているのはいわゆる大人達です。子ども達も、子どもなりに閑上の未来像について考えているようですが、基本的には話し合いの場に参加していません。

今「寺子屋 閑上」に通っている子ども達が、ちょうど大人になる頃に新しい閑上の町が完成します。つまり、新しい閑上の町をつくっていくのは、子ども達なのです。新しい閑上の町が活気のある住みやすい町になるのも、衰退した寂しい町になるのも、その鍵を握っているのは今「寺子屋 閑上」に通っている子ども達なのです。

そのことを考えると、子ども達の教育はとても重要ですし、手と手を取り合って一つの目標に立ち向かっていくことなどを学ばなければなりません。ですから、「寺子屋 閑上」の存在意義は私たちが考えている以上に大きなものだと感じています。常に気を引き締め、真摯な態度で努力するよう心がけていきたいと思っています。

6月26日、日本ラグビー協会から招待され「日本代表 v s 日本選抜」の試合を「寺子屋 閑上」の

子ども達と観戦するため秩父宮競技場に行きました。参加者を募ると小学校1年生から中学校3年生まで14名集まりました。小学生はラグビーを知らない子もいましたが、やはり本物を見るのはいいことで、全員食い入るように観戦していました。名取に帰ったらラグビーチームに入りたいという女の子もいました。大嶋と西條和代の二人で引率し、新幹線と地下鉄を使っていったのですが、帰ってきたとき二人はぐったりとしていました。



## 湊神社・富主姫神社～日和山に神社を～



この度の震災は国会議員等が何回も繰り返すように、未曾有の災害ですから、被災地が復興するまでには相当の時間が掛ると思います。そんな中、4月中旬、被災者の方からこんなことを言われました。「まだ、復興どころか復旧すらままならない状況で、これから私たちがどうなるのか全く分からないのでとても不安だ。復興がなるまで長い時間待つことになるだろう。途中で心が折れて閉上に戻ってくることをあきらめる人も多くでてくるだ

ろう。そうならないためにも、何か心の拠りどころ、閉上のそして復興のシンボルとなるものはないだろうか。」私たちには判らない切実な思いでした。

そんなことを被災者の皆さんと話していると、誰からともなく日和山の神社を再興し、それを復興のシンボル、閉上住民の心の拠りどころとしようという意見が出され、満場一致で決定しました。ついてはロシナンテスさんサポートをお願いしますということになり、閉上住人の心の拠りどころを作るため尽力しました。閉上にはお一人宮大工の方がいて、お社は製作に3か月以上かかるので、まずは神籬(ひもろぎ：写真)と鳥居を建てることとなりました。



6月9日、宮司さんと存命の氏子さんたちや閉上住民の方々が、日和山がいっぱいになるほど集まり(亡くなった方もおられます)、閉上住民の若手の方とロシナンテスのボランティアとで、深さ150cmの穴を掘り、神籬を建てました。簡易な祭壇にお供え物を並べ、宮司の祝詞を神妙に聞き、皆で拍手を打ちました。小高い日和山の上から、風に舞う切麻(きりぬさ)が閉上の町へ流れ

落ち、とても神聖で落ち着いた、穏やかな気持ちになりました。

6月14日、前もって6月9日に鳥居用に掘ってあった穴に、クレーンを用意して鳥居を建てました。この鳥居は、津波に流された松の木を利用し、あえて着色せずに自然の色のままの鳥居としました。やはり鳥居があると、神社らしく感じるようで、再び集まった宮司さん、氏子さんたち、ロシナンテススタッフ、そしてボランティアの方々もとてもいい笑顔をしていました。これ以来、閑上の被災者の方々は、帰る場所があるということ意識するようになったように思われます。

このような活動は、一見必要性がなく、地元の住民に任せるのが良いとの意見もあるかもしれませんが、やはりそこは被災後の通常ではない状態を考えると、私たちが住民の間に立ったり、パイプ役になったり、クッション役になったり、時にはおしりをたたいたり、住民の方にとっては必ず必要だったと自負しています。

## 閑上・スーダン大運動会

巡回医療や「どうする閑上」復興会議や、顔見知りになった住民との立ち話のなかで、ロシナンテスの活動地がなぜスーダンなのか、とかスーダンで何をしているのかと聞かれることがよくありました。そんな話の中で「スーダンに行ってみたい」「スーダン人に会ってみたい」という声が、大人からも子どもからも、多く聞かれました。川原は「スーダン人を連れてきますね」と、いつも答えていました。

2011年7月9日に、スーダンが南北に分かれることが決まっており、南北スーダンとも、これから新しい国づくりをしなければなりません。ちょうど東北の被災地が、いや日本が、復興へ向けて新しい国づくりをすることと重なりました。だから「スーダン人を連れてきますね」という言葉は、被災者には冗談に聞こえたかもしれませんが、川原は心の底で本気でした。「どうする閑上」復興会議で、スーダンの子ども達を連れてきて、閑上の子ども達とのサッカー大会の提案をすると、閑上の被災者の方々は大変喜びました。しばらくして、サッカー大会では女の子や小さな子どもが参加できないと気づき、運動会を開催することにしました。

閑上の被災者の方々に、運動会に変更した旨を伝えると、これまた大変喜びました。というのも、この地域では地区民大会(いわゆる町内会の運動会)が大変盛んで、本番の一か月も前から、町内ごとに綱引きやムカデ競争やリレーの練習を、本格的にするほどだそうです。被災者との種目決め等の会議では、積極的に意見が飛び交いつつも、話がすぐ横道にそれ、地区民大会の思い出話に花が咲き、皆で大笑いするという楽しい時間を過ごしました。このとき、心の底からの笑顔になる被災者の方々を初めて見た気がします。

閑上の被災者の方々の期待は募るばかりですが、南北スーダンの子ども達20名と、付き添いのスーダン人、及び同行するロシナンテスのスタッフの往復の渡航費だけでも莫大な金額になります。またスーダンはテロ支援国家に指定されていますし、国内事情も日本と全く違います。例えば、出国するのに自国のビザが必要だったりします。そんなことを考えると、途方もない計画だと思いましたが、為せば成るの一念で突っ走りました。スタッフミーティングを開き、運動会を開催する日を7月3日に決めま

した。

というのも、7月9日に南スーダンが独立するので、それまでにスーダンの子ども達を、自国に送り届けなければならないからです。次に川原は、協力者探しに奔走しました。古巣である外務省にも足を運び、幾人かの国会議員にも主旨を説明し、師と仰ぐ先生方に連絡を入れました。長崎大学の兼松先生を通じて長崎市役所やジョンソン・エンド・ジョンソン(株)に、仙台医師会等に、大いに賛同していただき、強力なバックアップをしていただけることになりました。協議の結果、遠路はるばる日本まで来てもらうのだから、被災地の運動会だけにとどまらず、日本の文化や、原爆の歴史等にも触れていただくこと、6月30日から7月7日までの間、京都・名取(宮城)・東京・長崎を周遊する旅程としました。宮城の七夕祭りと7月7日に帰国することになぞらえて「天の川プロジェクト」と命名しました。そして7月3日(日)に開催する運動会を「関上・スーダン 大運動会」と命名しました。

ここまででも大変な活動だったのですが、その後の活動が時間との戦いで、運動会関係でいえば、運動会会場の設定、設営ボランティアの募集、炊き出しの協力要請、飲料水提供の協力要請、用具の借用、参加する子ども達の募集、観覧者への宣伝告知、運動会を円滑に進めるためのスタッフの募集及び教育、予行練習場所の確保、予行練習の内容の決定、仮設住宅からの送迎バスの手配、駐車場の手配と整理などが、スーダンの子ども達の受け入れ関係でいえば、宿泊施設の手配、歓迎式と歓迎パーティの準備、食事の用意、お風呂の手配、送迎バスの手配、買い物の引率などの膨大な準備に奔走する日々でした。ひとつひとつ細かく説明すると、それぞれの準備に色々な思いや物語があるのですが、紙数が尽きてしまうので列挙にとどめさせていただきます。

二、三印象深かったのは、スーダン、日本両国の子ども達は、全く言葉が通じないにも関わらず、出会って5分も経てば、お互いの携帯電話や、ファッションなどに関心を持ち、すぐに友達になれたことです。子どもの持つ純粋なコミュニケーション能力に驚かされました。

スーダンでは運動会がないどころか、一列に並ぶということさえ、経験することがありません。ですから前日の予行練習では、列に並ばせることにすら苦労はしましたが、玉入れやかっこ、リレーなどは、スーダンの子ども達にとって初体験で、とても楽しそうに、しかも真剣に参加していました。



運動会当日は雨の予報でしたが、快晴に恵まれ、笑いと感動と涙のるつぼと化しました。参加した子どもたちとスーダン人、応援に来た観覧者、そしてスタッフを含め300人を超える大・大運動会になりました。

午前9時の開会式に始まり、一種目目の玉入れでは、バスケットボールをしているスーダンの子ども達が数人いて、シュートを入れるように高い確率でかごの中に玉を放り込んでいました。前日の予行練習では、初めて玉入れを見て何がおかしいのか、腹を抱えてゲラゲラと笑っていたのですが、いたずら

に玉を投げるのではなく、狙いを定めて確実にかごに放り込む姿は、不思議な玉入れの光景でした。

次の競技は、障害物競争で、跳び箱や平均台などをクリアして、最後に、手を使わず粉の中に入ったあめ玉を口に含むのですが、毎回、競技指導員が頭を粉に押し付けるので、スーダン人の顔が粉で真っ白になり、会場の笑いを誘っていました。また、跳び箱を手を使わずに越えるスーダン人の男の子が数人いて、アフリカ人の運動能力の高さ、ばねの強さに皆感心していました。後から聞くと、彼らは跳び箱など見たことがなく、どうやって飛ぶのかわからなかったそうです。

次の競技は、デカパン競争といって、布で作った大きなデカパンの片足に一人ずつ入り、リレー方式で競争する競技で、閑上の低学年の小さな女の子と、背の高いスーダンの高校生の女の子が、同じデカパンに入り、スーダンの女の子が閑上の小さな小学生の肩をかばうように抱きながら走る姿に、会場中が微笑みました。このシーンは余程印象的だったらしく、翌日の新聞に、カラーで大きく取り上げられました。

次の競技は、スタッフや観覧保護者による風船割り競争で、ロシナンテスの女性スタッフのスーダン人のご主人が、風船を割るときに、その巨漢で折り畳み椅子を破壊するという楽しい事件がありました。これにはみんな大笑いでした。閑上の大人の方々は、地区民大会の血が燃えたのか、真剣に猛烈な勢いで走り、風船を割っていました。

午前中最後の競技はかけっこで、閑上の幼稚園の子から学年ごとに走りました。スーダン人が走る組はすべてスーダン人が一位になり、改めて、アフリカ人の運動能力の高さを見せつけられました。

昼食は、カレーライスの炊き出しや、閑上朝市から直送された食べ物が振る舞われ、スーダン人はスーダン人がかたまったりすることはなく、スーダンの子ども達と閑上の子ども達が入り混じって、言葉が通じないはずなのに、楽しそうに会話をしながら食事をしていました。

楽しい昼食後、なんぼくスーダンの子供たちが、それぞれの地域の歌



と踊りを披露してくれました。これに呼応して、閑上大漁節が歌われましたが、最初はだれも踊り出しませんでした。最近では、閑上大漁節の踊りは、徐々に忘れられていっていたのです。しかし、二名の閑上のおばあさまが、踊りだし、それにつられて、スーダンの子供たちが踊りはじめ、それに引き続いて閑上の子供たち、大人たちが加わり、大きな輪となりました。閑上大漁節の唄と踊りで、

閑上の人々の心が一つになった瞬間でした。忘れ去られようとしていた大切なものをスーダンの子供た



ちに気付かされたのです。

今回の運動会は、当初、閑上対スーダンのサッカー大会をやる予定だったので、運動会も閑上対スーダンにする予定でしたが、閑上の被災者の方々と相談した結果、閑上の子ども達とスーダンの子ども達を混ぜて、紅組と白組に分けることにしました。それは今回の運動会が、戦いではなく、交流だからです。閑上とスーダン、それぞれ新しい町づくり、新しい国づくりに向かって、子ども達も進んで行かなければなりません。閑上とスーダンは遠く離れていますが、心の手と手を取り合って、ともに歩んでいかなければなりません。ですから、日本人とかスーダン人という分け隔てはなく、同じ人間同士としてひとつになり、その中で紅白に分けることにしたのです。

いよいよ最後の競技、紅白リレーです。スーダンには、運動会というものが存在しないので、スーダンの子ども達は、紅白に分かれる意味さえわからなかったことでしょう。しかし、閑上の子ども達とのコミュニケーションの中、午前中の競技を終え、この時点では、自分が紅組であるとか白組であるとか、はっきり認識していたようです。このような体験は、今までの生活の中に無かったことでしょう。

スタートのピストルが鳴り、一年生から順に高学年へとバトンタッチする、全員参加の紅白リレーです。閑上の子ども達とスーダンの子ども達も、自分が走り終えた後でさえ、一生懸命に自分の組を、夢中で応援していました。勝負は白組が勝ち、白組の子ども達は、日本人もスーダン人も、飛び上がって喜んでいましたが、もっと印象的だったのが、負けた紅組のスーダンの子ども達が、今にも泣きそうな表情で、がっくりとうなだれていた事です。彼らには、この悔しい思いをした貴重な体験を忘れないで欲しいと思います。

日本の一般的な運動会では、閉会式の最後に選手退場がありますが「閑上・スーダン 大運動会」では、常識にとらわれずに、翌日、名取を出発するスーダンの子ども達を送り出そうと、閑上の子どもも



観覧者もスタッフも、全員で長い長いアーチを作り、その中をスーダンの子ども達にくぐって退場してもらうようにしました。その長さは50m以上もあり、感激して感極まり涙を流すスーダンの子どもたちもいました。彼らは、このアーチが余程気に入ったらしく、帰国した際に空港でお別れするとき、このアーチを作ってお別れしたそうです。

避難所で小さな子どもからお年寄りまで、全員がラジオ体操をできたように、日本人なら皆すんなりと運動会に参加できます。運動会について、知らないことがないくらいです。保育園や幼稚園の頃から、運動会を毎年体験します。もしかすると、運動会は日本の教育の原点かもしれません。

ロシナンテスは、2年前にスーダンで運動会を開催しましたが、いくら競技の内容やルールを説明し

たり、実際にやって見せても、全然理解されずに運動会の態をなしませんでした。ところが今回は、大人がそれほど介入しなくても、子ども同士のコミュニケーションのみで、立派な運動会になりました。

ここがとても重要で、これから未来を創造していく両国の子ども達が、一方は規律や行動様式を教え、一方は規律や行動様式を学び、ひとつの運動会を立派につくりあげました。閑上の子も達も、スーダンの子ども達も、この日学んだことを忘れずに、新しい未来を創造して行ってほしいものです。

運動会のようなイベントを行う活動は、一見派手に見え、マスコミ等にも取り上げられやすいものですが、そのことが目的ではなく、その効果は、本当は10年後や20年後といった、遠い未来にあるものだと思っています。これからも、労を惜しまず、未来の日本のために、未来の世界のために、このような活動を続けていきたいものです。

## 玄海島視察団

7月21日、川原の高校のラグビー部の二級上の先輩、大津明生さんががれき撤去作業にきました。福岡で都市計画等の仕事をしており「どうする閑上」復興会議にもオブザーバーとして参加していただき、積極的に被災者の方と交流を持っていました。閑上の復興に強い関心を持ち、被災地の復興は都市計画等に共通する部分も多くあり、何か自分にしかできない形で、閑上の被災者の皆さんの役に立ちたいと考えたようです。

福岡県では平成17年3月20日、福岡西方沖地震が発生し、福岡市沖の玄界島は壊滅的な被害を受けました。福岡市に住む大津さんは、がれき撤去作業から帰宅すると、当時の福岡市玄界島復興担当部長や、玄界島を尋ね、閑上復興への協力をお願いしました。

7月22日、「どうする閑上」復興会議に、大津さんが、当時の玄界島復興担当部長と、現福岡市の職員と、福岡青年会議所のメンバーを連れてきてくださいました。様々な質問や意見が飛び交い、白熱した会議になりました。しかし、今回は行政側からだけの意見しか聞けなかったので、「どうする閑上」復興会議のメンバーは、復興を成し遂げた玄界島の住民の皆さんのお話も聞きたいと訴え、8月中旬に閑上の被災者が玄界島を訪問することに決まりました。



8月17日、小学1年生から60代まで、各世代総勢11名(内、小学生から高校生6名)の玄界島視察団一行は福岡空港におり立つと、昼食を済ませ、福岡港より玄界島へ向かいました。玄界島の港では、百人を超える住民の方々が大きな横断幕を広げ、大歓迎してくれました。「こんな場面は、テレビなんかでしか、みたことがない」と、一同は大感激していました。

歓迎式を終え、DVDやパネルなどを用いて、玄界島の復興の様子を学びました。意見交換会では年長者の閑上の方言が全く通じず、若い方が通訳をするという笑いを誘う、和やかな場面もありました。

その間子ども達は、お互いに海の近くで育ったもの同士共通するものがあるのか、あっとゆう間もなく親友のように仲良くなり、女の子はおしゃべりに夢中になり、男の子は外で元気よく遊んでいました。

夕方、港で歓迎バーベキューパーティを用意してくださり、サザエや鰯の開きといった、ご当地の海産物もたくさんいただきました。大人たちは、復興の話もさることながら、そこはやはり海で育った人間同士、漁の話や魚の種類やその呼び方の話して、多いに盛り上がっていました。玄界島の元気のいい男の子たちが、港から次々に海に飛び込むと、閑上の男の子も負けじと海に飛び込み、ほんの僅かの間ですが、津波の恐怖を忘れられたようでした。

19時45分の最終便で、大人たちは福岡市へ戻り、子ども達は玄界島のご家庭にホームステイさせていただきました。

2日目は朝から玄界小・中学校の生徒による玄界島太鼓が披露されました。閑上太鼓も見事な演舞ですが、それをも凌駕するほどの躍動感とリズムの激しさがありました。午後からは子どもは漁船に乗り、釣りクルージングに行き、大人は島内の視察と、最後の意見交換会を行いました。



意見交換会で閑上の被災者の方々が学んだことは、これから始まる復興へ向けて、住民がバラバラに行政に対して意見を言うのではなく、被災した住民がひとつにまとまり、意見をひとつに調整し、行政と手を取り合って、復興の道を歩むということでした。このことに気付かされただけで、今回の交流は成功したといえるでしょう。意見や考えの違う人を排除するのではなく、全員を取り込んで十分な議論を重ね、意見をまとめあげることが、復興に向けての重要なポイントのようです。今回の活動では、ロシナンテスが、閑上の被災者の方々と玄界島を結ぶ、パイプ役的な立場でしたが、十分な責を果たせたと思います。

## 閑上復興いも煮会

閑上地区は、昔ながらの風習が色濃く残っている部分があります。それは年長者のいうことは絶対で、言うことを聞かなければならず、年長者に対し意見することなどできないそうです。ですから、子どもを持つ世代の若いお父さんやお母さんは、どんな会合に出ても、自分の意見をいうことができませんでした。若い世代の保護者保護者の有志が集まり、自分たち保護者で復興を議論する場を持ちたいので、バックアップしてほしいとの相談があり、ロシナンテスも若い保護者保護者が意見を述べられない状況を知っていたので、その申し出を引き受けることにしました。

7月28日、第1回目の会合があり、今まで他の会合では出なかった、子どもを持つ世代ならではの様々な意見が出ました。特に、小・中学校の位置や、居住区域の位置については、行政や年配の方々の考えと、全く違うものでした。

8月4日、第2回目の会合に、市役所の震災復興室の方を招き、土地利用等の説明をしていただいたのですが、大きく意見がぶつかり、激しいやりとりとなりました。この時、口角泡を飛ばし、議論した

ところで、20人程度ではあくまでも少数意見となり、意見が取り上げられそうもないことを痛感しました。そんなとき、福岡西方沖地震の被災地、玄界島では、住民が一体となり、選挙で選ばれた委員で構成される復興委員会をつくり、行政と手を取り合い、復興を成し遂げたことを知り、閑上住民が一体となる必要性を強く感じました。

閑上地区では、東北大震災で1,000名近い方がお亡くなりになり、現在は約6,000名の方が存命しています。そのうち、約2,000名が仮設住宅に移り、半数以上の約4,000名の方が、民間のアパートや親戚縁者の所へ移っていますので、まずその方たちの所在を確認しなければなりません。名取市に問い合わせても、個人情報保護法がネックとなり、所在を確かめることはできません。また、仮設住以外の方には、市の復興会議の内容や、復興の進捗度合いなどの情報が一切入らないようで、所在を確認し、情報を提供することも、とても重要だと感じました。

8月25日の会合で、仮設住宅以外に住む方の所在の確認方法を議論したのですが、そのためには、多くの人が集まるようなイベントを開催し、その時、何らかの方法で参加者の住所を入手することが得策と考え、9月19日(月)、敬老の日に「閑上復興いも煮会」を開催することとしました。善は急げで、9月2日の会合で、閑上復興芋煮会に関する具体的内容を決定しました。

今回は「閑上・スーダン大運動会」のときよりもさらに準備期間が短かったのですが、主催がロシナンテスではなく、若い世代の保護者保護者(「閑上復興いも煮会」実行委員会)が主催者となり、ロシナンテスは全面的にバックアップをするという態勢だったので、スタッフの人数も多く、仕事を分担して活動することができました。

主な準備としては、ポスターの用意、テレビやラジオ新聞等のメディアを通じての宣伝、スタッフTシャツの用意、いも煮の食材および道具の手配、テントやステージの手配、開催場所の手配、パブリックコメントブースや「ゆりあげ思い出探し隊」ブースの準備、いも煮以外の炊き出しの手配、飲料水の手配、子どもの遊び場ブースの準備等々がありました。ポスター貼りを例に挙げると「閑上・スーダン大運動会」のときは、限りあるロシナンテスのスタッフのみだったので、仮設住宅や小・中学校にしか貼れませんでした。今回は10名程度のスタッフで手分けし、2日間で、50ヶ所以上にポスターを掲示することが出来ました。

「芋煮会」前日までに、テントや長机、折りたたみ椅子などを、公民館、商工会、運動公園、市役所に借りに行き、子どもをもつ若い世代の保護者保護者のお母さんたち数名も参加して野菜の切り込みや下茹で等、いも煮の仕込みをし、準備が整いました。

震災以降東北で、ロシナンテスが関わってきた行事やイベントは、いつも快晴に恵まれていましたが、今回はとうとう雨天でした。早朝6時に、テント設営部隊が市役所前に集合したときには、本降りでしたが、設営を開始すると、小雨になり、テントが完成する頃には、雨は止まりました。前日、業者により





設営されたステージ前の両脇に、テントがずらりと並び、壮観な光景でした。奥から「いも煮ブース」「カレーライス&カステラブース」「スーダン料理（ホンムス）ブース」「笹かまぼこブース」「揚げかまぼこブース」「コロッケブース」、反対側は「支援物資配布ブース」「飲料水ブース」「パブリックコメントブース」「受付ブース」、少し離れて、津波に流された写真を集めた「ゆりあげ思い出探し隊ブース」

「生ビール販売ブース」「東北の地酒無料配布ブース」、最後に小さいお子さんのための保護者「キッズコーナー」と並びました。7時半から、保護者保護者のお母さん方がいも煮の調理を始め、8時半頃からそれ以外の各ブースの準備が着々と進みました。10時を過ぎた頃、ほぼ全部の用意が終わり、後は11時の開会を待つだけとなりましたが、ちょうどその頃、再び雨が降ってきました。後に笑い話に話したのですが、スタッフ全員しばらくは毎日食卓にいも煮があがることを覚悟していたようです。つまり、いくら無料でいも煮を配布するといっても、この雨の中、わざわざ市役所前の広場まで出向いてこないだろう、と予想していたのです。

ところが、10時30分を過ぎた頃、じわじわと客足が増え始め、11時にはステージ前の広場が、傘で埋め尽くされ、パブリックコメントブーステント内の椅子は、年配の女性で埋め尽くされました。

午前11時ちょうどに、小中学生の子どもを持つ二人のお母さんの司会者が、勢いよくステージに飛び出し、「閑上復興いも煮会」第1部、「閑上の集い」が始まりました。実行委員長高玉友伸さんが開会の挨拶で、来場した閑上の被災者の方々に向かって、「復興に向けて住民が一丸になりましょう」と声高々に宣言し、続いて川原が「私は閑上の応援団長だ!!」と叫び、奇跡的に津波の被害をまぬがれた日和山町内会の旗を披露し、最後に、若い保護者保護者の中の論客の方が、パブリックコメントの提出を薦めました。その頃には、再び雨も弱まり、ステージ前広場は、人でびっしり埋め尽くされました。



続いて第2部いも煮会の部です。参加者は、あらかじめ記入した参加票と引き換えに、いも煮を受け取ることができます。いも煮ブースの前には、長蛇の列が出来ましたが、いも煮の配布方法等は、山形市の日本一のいも煮会を参考にしたので、非常にスムーズに進み、長蛇の列はすぐに解消されました。そしてあちこちで、半年ぶりの再会を喜ぶ声が聞こえてきました。涙を流して、お互いの肩をたたき合う人々も多く見受けられました。これには一同感動し、この時点でいも煮会の成功を確信しました。唯一失敗したことを挙げるとすれば、いも煮ブース前にしか参加票回収所を設けなかったのも、いも煮以外の食べ物だけで食事を済ませた人の参加票を、回収できなかったことです。

津波に流された写真は、名取市立閑上小学校の体育館に集められ、誰もが探しに行くことができます。ところが、まだ未だ心の傷や津波の恐怖が癒えていない人も多くおり、どうしても小学校の体育館に足

を運ぶことができない、という声を聞いていました。写真の管理は「ゆりあげ思い出し隊」というボランティア団体がしていたのですが、その一部だけでも津波の被害のなかった市役所前まで持ってこようと、失った写真を探すブースを作りました。この写真ブースには、開会前からいも煮会終了まで、入れ替わり立ち替わり、多くの人々が群がっていました。津波による大きな被害を受けた閑上小学校に、これほど多くの人が行くことができないことを知り、愕然としました。

3日後に迫ったパブリックコメントの締切に間に合わせる為に、パブリックコメントブースを設けたのですが、生憎の雨の為に、いも煮を片手の年配の方々に占領され、パブコメブースは食堂と化しました。晴天ならば、ステージ前広場にゴザやブルーシートを敷くように用意していたのですが、自然の力には勝てませんし、お年寄りに立って食事をさせる訳にもいきません。それよりも何よりも、この雨の中、約1000人もの被災者の方々が、来場してくださったことが、心が晴れるように嬉しく、感動すら覚えました。行政に対するパブリックコメントも大切ですが、閑上の住民がまだ閑上を忘れていない、閑上を欲している、ということこそが一番大切だ、と考えました。

食事がひと段落したところで、ステージ上では、津波の被害により、現在別の幼稚園に通っている閑上わかば幼稚園の園児による「ソーラン節」「まるまるもりもり」の演舞の披露や「閑上太鼓」「閑上大漁節」の披露がありました。園児の保護者保護者は、ステージ正面を陣取り、大きな声援を送りながら、ビデオや写真の撮影に夢中になっていました。このことから震災の影響で、様々な行事が取りやめになったことがうかがえます。最後に、現役の閑上小学校の生徒から、はるか数十年前に閑上小学校を卒業した、閑上小学校卒業生まで、各世代ステージにあがってもらい、閑上小学校校歌を大合唱しました。最初、小学生は恥ずかしがって小さな声で歌っていましたが、卒業生である大人たちが大きな声で歌うので、小学生たちも最後には声高らかに歌っていました。

いも煮会が終了し、片付けを始める頃には、再び雨は本降りになりましたが、閑上のスタッフの方々も、ボランティアスタッフの方々も、その表情はとても晴れやかで、体もよく動き、短時間で全ての片付けが終了しました。



「閑上復興いも煮会」はスタッフ全員の努力の甲斐もあり、大成功だったと思います。しかし、閑上の復興はまだ、そのスタート地点にも立っていませんし、そもそも、このいも煮会開催の目的は、閑上の住民を、ひとつにまとめあげるための手段として開催したのですから、ゴールではありません。つまり、これからの活動が、「いも煮会」以上に重要となります。このようなイベントが成功した後は、その満足感からその後の活動が収縮しがちなのですが、それでは意味がありませんし、参加した方々も「結局打ち上げ花火（イベント）をぶちあげただけか」と思い、関心が薄くなっていくことでしょう。ですから、大きなイベントが終わった後に、間髪を入れずに参加者に対して、アクションを起こすことがとても重要だと考え、何をしたら効果的かということをお話し合いました。それも今回だけで終わるの

ではなく、長く続けられるものを考えました。そこで、「閑上復興いも煮会」の住民スタッフで、「閑上復興いも煮会」のお礼と結果報告を兼ねた「閑上復興だより」という名の新聞を発行することとなり、現在進行中です。



## おわりに

この半年間のロシナンテスは、巡回医療から始まって、がれき撤去、「閑上復興いも煮会」まで多種多様な活動をしてきました。このレポートに書ききれなかった活動も多くあります。ロシナンテスは、被災者を支援するとか、助けるとか、ケアをするというような意識はありません。そういった意識を持つと、知らず知らずのうちに上からものを見る目線になりがちで、被災者の方が本当に求めているもの、あるいは、被災者の方に本当に必要なものが何かわからなくなってしまうからです。

ロシナンテスは今、被災者の方々と一緒に復興に向けて歩いています。これから年月をかけて復興するのは、ロシナンテスではなく、被災された方々です。それでも、ロシナンテスは被災された方々と一緒に歩んでいきます。その必要性の是非を問う声もないとは言いませんが、もし立場が逆ならきっと心強いことでしょう。元々宮城県には縁もゆかりもなかったのですが、今ここで活動していることを考えれば、やはり何か縁があったのでしょうか。この「縁」が、将来に向かって「絆」となるような活動をしていきたいと思っています。こんなことが日本全体に広がるよう精進していくつもりです。

この度の被災地におけるロシナンテスの半年間の活動は、一週間が一カ月に感じるほどのめまぐるしさでした。3月11日が、とても遠い日に感じます。しかし、ほんの一瞬立ち止まって振り返ると、あの日が今日に重くのしかかります。その度に改めて気を引き締めて、頑張らなければと思います。

ひ  
と  
り  
の  
為  
に

み  
ん  
な  
は

み  
ん  
な  
の  
為  
に

ひ  
と  
り  
は

